

知的障害者の授産施設などを運営する社会福祉法人「上州水土舎」(富岡市後賀)が主催する「谷内六郎と水土舎の愉快な仲間たち展」が12日まで、富岡市立美術博物館で開かれている。水土舎で働く知的障害者34人と、1981年まで週刊新潮の表紙を描いた画家、故谷内六郎さんの作品などが展示されている。

同展は2年ぶり4回目の開催。水土舎で週1回開かれる「表現教室」の参加者が描いた「ストローク」は、クレヨンで暖色系の線を幾重にも重ねた優しい色遣いが印象的。トマトやサンタクロースの真ん中に大きな時計を

ていた生前の谷内さんと面識があった縁で、親族の許可を得て谷内さんの作品も20点を展示した。同館1階の市民ギャラリーに入るとまず、水土舎で働く佐藤尚久さん(34)の「ぼくの好きなもの」が目に入る。青やオレンジ色の背景に、群馬サファリパークのサファリバスなど92台のバスが精密に描き込まれている。98年に開催された長野アートパラリンピックで入選した作品だ。

価値観、技法とらわれず

富岡市立美術博物館で12日まで 故谷内六郎さんの作品も



仲間の作品を眺める水土舎で働く佐藤洋輔さん(右)と金谷さん=富岡市黒川の富岡市立美術博物館で

授産施設で働く34人絵で表現

描き込んだ、清水淳さん(27)のユニークな作品も目をひく。

知的障害者の描く作品は、専門的な訓練を

受けない芸術を指す。「アウトサイダーアート」というジャンルと

して、ヨーロッパを中心

に広く知られていく。

表現からは「生き生きとした面白い作品がたくさん生まれる」とい

う。

「知的障害者が自立するためには、地域の人たちの理解が不可欠だ」と金谷さんは話す。「展覧会に少しでも多くの人が訪れて、水土舎のことを知ってほしい」と期待を寄せていく。

展覧会は午前9時半～午後4時半、12日は午後4時まで。入場無料。問い合わせは水土舎(0274・64・1254)へ。